患者の社会参加・高齢者の相手…

会話型ロボ 開発担う

IoT端末視野■法人レンタル

VB、大手と提携

離れた場所にいる人と会話したり、病気の子供が自宅にいながらにして授業に参加したり――。ベンチャー企業（VB）が家庭や教育の現場に溶け込む会話型の卓上ロボットを開発している。連携先を大手企業や技術力のある中小企業のネットワークにまで拡大し、事業基盤の確立を急ぐ。

「駅に着いたよ」。仕事を終えた都内在住の男性がスマートフォン（スマホ）に入力した伝言を自宅のダイニングテーブルに置いたコミュニケーションロボット「ボッコ」が音声で再現した。「分かった。今から迎えに行くから」。ボッコに妻がそう答え、子供と一緒に駅に出かけた。

ボッコはロボット開発VBのユカイ工学（東京・新宿）が開発。スマホと連動して文字を音声に変換したり、音声の伝言を送信したりし、遠隔から自然に会話ができる。価格を約3万円に抑え、インターネットなどで販売している。利用者は数千人いるという。

会話ができるだけではない。「歯を磨きなさい」「寝る時間だよ」――。「ロボに言わせると、発言が迫力を増し、子供が聞いてくれる」。ユカイ工学の青木俊介最高経営責任者（CEO）は自身もボッコを使って検証済みだという。

もともとは自分の子供との会話をより大切にしたい思いから、ボッコを発案した。将来は家電製品とも連携させ、あらゆるモノがネットにつながる「IoT」端末を目指して家電メーカーなどとの提携に取り組む。

家族などの会話を円満にする道具として注目を集めているコミュニケーションロボット。新エネルギー・産業技術総合開発機構（NEDO）によると、国内生産は2015年の3億円から25年には36億円に拡大。さらに35年は341億円にも増え、市場が急成長するという。製品開発はユニークな発想を持ち、迅速に動けるVBが先行する。

東京都三鷹市のマンションの一室に会社を構えるオリィ研究所。同社が開発している対話ロボット「オリヒメ」は学校や病院で活躍する。カメラとスピーカーを内蔵し、利用者はパソコンやスマホで遠隔操作。オリヒメの近くにいる人と会話できる仕組みだ。

「自分も不登校になった経験があって、学校に行けない子供でも授業に参加できれば」。同社の吉藤健太朗代表はオリヒメに強い思いを込めている。16年はベンチャーキャピタル（VC）などから2億円以上を調達し、生産を約500台に増やした。今年は1000台の増産を目指す。

オリィ研究所のビジネスモデルは、ロボットを法人に貸し出すことが特徴だ。月額3万円からのレンタル料金で安定した事業基盤を築き、利用者の幅を広げていく。今年は病院への提案に力を入れる。意識がはっきりしているALS（筋萎縮性側索硬化症）患者の社会参加を支援する。

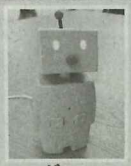
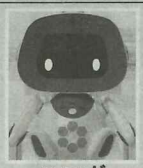
ロボットVBを支えるのは設計図を形にする中小のモノ作り企業だ。町工場が立ち並ぶ東京都墨田区。オリヒメの試作品はその一社、浜野製作所が製作した。VBの有望性を見極めて出資し、積極的に支援する。

同社の浜野慶一CEOは「オリィ研究所はビジネスモデルがしっかりしている」と評価。一時は事務室も貸すなど、立ち上げを後押しした。試作品づくりに際してほかの町工場も巻き込んだ。それぞれに強みがある中小企業のネットワークを活用しながら、VB支援で墨田区を元気にしたい考えだ。

大手企業もVBを中心にした開発の輪に入っている。人工知能（AI）を搭載し、独り暮らし高齢者などの会話の相手になるロボット「ユニボ」を開発しているユニロボット。同社は富士通のVCやニコンなどが設立したプライベートファンドなどから約3億円の資金を調達した。

そればかりではない。

ロボットVBは大企業と資本・販売提携。中小は試作に協力

商品名（開発企業）	概要
 ボッコ（ユカイ工学）	・ヤフーのスマホアプリ「myThings」に対応 ・サービス業者と連携、さまざまな情報をボッコに届ける ・家電メーカーとの協業にも取り組む
オリヒメ（オリィ研究所）	・浜野製作所が試作品づくり ・2016年、VCなどから約2億円を調達、生産500台に ・今年は1000台の増産を目指す
 ユニボ（ユニロボット）	・富士通系やニコン系から約3億円の資金を調達 ・パートナーの販売網も活用